

ー金沢大学サテライト・プラザミニ講演ー

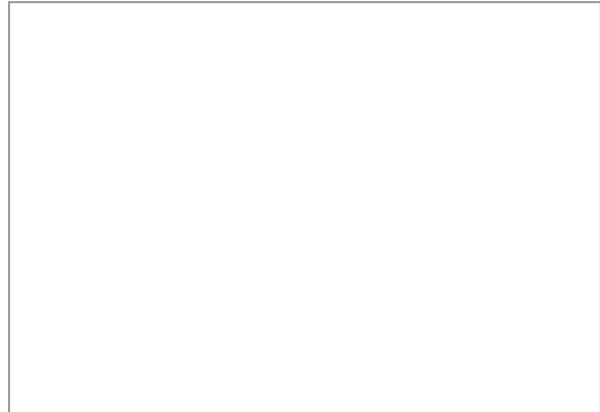
場所 金沢大学サテライト・プラザ

日時 平成14年11月2日(土)午後2時～3時30分

テーマ 「市民のためのやさしい哲学入門」

講師 岡崎 文明(金沢大学教育学部教授)

今日は「市民のためのやさしい哲学入門」をというご下命であります。これに果たしてお応えできるかどうか分かりませんが、ともかくもお引き受けさせて戴きました。これはテーマとして大き過ぎますので、絞りまして「知と愛」という副題を付けさせて戴きました。しかし、1時間半ぐらいでお話しするには、これでもまだ大き過ぎますので、「知と愛」を全体に見ながらも、「愛」を中心に話をさせて戴こうと思います。



「知と愛」は今日ではさまざまな場面で話題にされています。映画やテレビのドラマにおいて、あるいは文学、宗教、芸術(音楽、絵画、彫刻)また建築などにおいてさえも、こういうものをテーマとした作品が見受けられます。人類の歴史を辿れば、昔からこれは人生のひとつのテーマとされてきたことが分かりますが、今日もまたそういう状況を見ることができます。

夏目漱石の『草枕』の冒頭に「智に働けば角が立つ」と述べられていますが、「知」というものはしばしば人々の間に対立を生み、ときには激しい闘争にまで発展することがあります。しかし、一般的には、最後に「愛」が現れて対立抗争に終止符を打つ、という筋書きがあります。

西洋文学に目をやりますと、ドストエフスキーという小説家がロシアにいます。彼は19世紀の人ですが、当時のヨーロッパ・ロシアの時代状況を通してさまざまな問題を描いています。彼の作品『罪と罰』は文字どおりに罪と罰という深刻な問題をテーマとした本です。

この作品の主人公は青年ラスコーリニコフであります。彼は法学部の学生で、1つの論文(レポート)を書きました。凡人は1人を殺ただけでも殺人罪に問われて罰せられるが、ナポレオンやアレクサンダー大王のような非凡人、天才は、多数の人を殺しても断罪されず、逆に英雄として賞賛される。それはなぜかという問いを投げかけます。そして、罪は「善い行い」によって償われる。だから、戦争で多数の人を殺しても、それ以上に多くの

人々に平和と幸福をもたらせば、それは「善い行い」であって、戦争の罪を補っても余りが出、その罪は帳消しにされて英雄になるのだ、という理論を作ったわけです。これは昔からさまざまに焼き直されて、今日もそういうことを考える者は珍しくないわけです。

しかし、ラスコーリニコフはその理論を実証しようとして殺入を実行するのです。小説ですから、かかる舞台設定ないし思考実験が可能なのです。

ラスコーリニコフは強欲非道な高利貸しと思われた老婆を殺します。そこにたまたま老婆の妹が来合わせてしまい、その妹も殺してしまいます。

ラスコーリニコフにしてみれば老婆を殺してお金を取り上げて、そのお金をさまざまに善用しようというつもりでやったわけですが、実際に人殺しをした後は、自らの罪の意識に恐れおののき、良心の呵責に苦しむ日々を送るようになります。そうしているうちに、捜査官ポルフィーリイの捜査線上にラスコーリニコフが浮かび上がってきます。ポルフィーリイは彼が真犯人であることを直感して、自白を促すような話をするわけですが、ラスコーリニコフは内心苦悶しつつも頑として受けつけず固く口をつぐんでしまいます。

そうこうしている中で、ラスコーリニコフはソーニャという公娼に出会います。公娼というのは当時のロシアの国家公認の娼婦でした。ソーニャがこういう職業に就いているのは家族を養うためでありました。ラスコーリニコフは彼女の自己犠牲的な生き方を知り、またソーニャの清らかな愛にうたれまして、ついに罪を認め、裁判を受け、刑に服するのであります。そして最後には、ソーニャはラスコーリニコフの罪と罰を一緒に担って、流刑地シベリアに赴く、という筋立てです。

本書の主題は、ラスコーリニコフを罪と良心の呵責から救ったのはソーニャの純粹無垢な愛であった、かかる愛こそが罪をも罰をも溶かし帳消しにしてしまうのだというのであります。罪も罰も溶かすのはいわゆる「善行」ではないのです。

凡人は1人の人を殺しても罪に処せられるけれども、天才は多数の人を殺しても、さらにより善行を重ねれば帳消しにされて逆に賞賛されるのだというのは1つの理論です。稚拙な理論であるにしても「知」の立場です。「知」には短所や限界があります。『罪と罰』の主張は、「善行」ではなくて「愛」こそが、「知」の中にある殺人、争い、戦いといった悪を帳消しして、人の心に平和をもたらし、人を救うのだと主張しているわけです。こういう愛は普通には「自己犠牲的な愛」と言われています。

この意味で、「愛は知に勝る」という思想がドストエフスキーの根底に流れています。こういう思想は、例えば19世紀から20世紀にかけて生きた小説家ヘルマン・ヘッセの『知と愛』という題名の小説にも見られます。西洋の文学の中にはそういう問題を論じながら、やはり最後には知よりも愛が優位するということを認めていく思想が今日においてもあります。

しかし、愛というものはそういう側面ばかりではなく、別の面もまた持っています。近代日本の小説家に有島武郎という人がいます。彼は19～20世紀に活躍した人ですが、彼に

『愛は惜しみなく奪う』という評論があります。そこでは「愛は与えるものではなくて、惜しみなく奪うものである」と主張されています。愛するものを奪い取る。これが愛なのだという主張です（同書 16 節）。近代日本の知識人の愛の典型的な捉え方であります。そして、こういう自我中心の考え方の中で、彼らはさまざまに苦しんでいきます。夏目漱石や太宰治などもそうですが、苦悶の中でさまざまな近代小説を生み出しました。

例えば、漱石の『こころ』という作品がありますが、やはりこういう奪う愛をテーマとしています。『こころ』の主人公の「先生」は美しい妻を持っていました。しかし、彼は青年時代に親友の恋人を奪って妻にしてしまった。そのために親友は自殺に追い込まれた。これは惜しみなく奪う愛で、知の立場では悪いことだとはわかっているわけですが、抑えきれなくて遂に奪ってしまう。悪いこととは知りながらも奪わないではおれない、そういう魔力としての愛があることを示しています。

ですから、ここでも知は愛に勝つことができない。奪う愛もやはり知に優位する力を持っている。このような愛は、結局自分をも他人をも不幸に陥れる、というのが日本近代文学の一つの帰結で、こういう愛を「利己愛」、「自己中心愛」、あるいは「エゴイズム」と言うわけです。先程のソーニャの我が身を捧げて他者を生かすという自己犠牲愛とは少し趣が異なるものです。

エゴイズムをテーマにした漱石の作品は、他にも『門』があります。そして晩年の絶筆の『明暗』という書物の中では、そういうエゴイズム、自己愛をどのように克服していくかという道を探っています。

こういう日本近代文学に係わったインテリたちは自分を中心とするエゴイズムと格闘したのでありまして、漱石は『門』では参禅して、エゴイズムという自我の滅却を試みたが、しかしうまくいかなかった、そして最後に彼は「則天去私」という形でエゴイズムを排除する道を探っていた、と一般に言われていますが、しかし徹底しないままこの世を去ったと言われています。エゴイズム、自己中心愛は日本近代文学の作家たちを悩ました問題の 1 つです。

このように愛は知に優先しますが、以上見ましたように、愛は 2 つの極端な現れ方を持っています。1 つは自己犠牲的な愛であり、もう 1 つは他者を犠牲にしても自己を愛する自己愛です。しかし実際に存在する愛はこれらの典型の中間と申しますか、この 2 つの典型が混合したものでありましょう。

今日ここで話ししようと思うことは、こういう愛は西洋でも東洋でも同じものがあるわけで、これをどのように分析するかということです。これを材料にしながら、哲学の入門的な話をさせて戴きたいと思います。

しかし、愛をテーマに哲学論文を書いた人が最後に、次のような言葉で締め括っています。「愛についてどんなにすばらしい哲学的な論文を書いたとしても、その愛は観念の中に

あるに過ぎない。それは愛を本当に知ったことにはならない。本当に愛を知るには、実際に愛してみなければならぬ。なぜならば、愛は実践においてはじめて判るものだから」と。つまり、哲学的に（知の立場から）愛を理解するには限界がある、ということです。確かに愛にはそういう面があります。

とは言え、「知と愛」は西洋の思想史を貫く一つの縦軸でもあります。したがって、この哲学的な分析にも一定の意味があると思いますので、そういう方面から見ていきたいと思っています。

「愛」は基本的に「高まる、高貴」という性質を持っています。さらに「合一する、一つになる」という性質もあります。「自己愛」にも「犠牲的愛」にも共に、愛する者（主体）と愛される者（対象）が「一つになる」そして「高まる」という働きがあります。

例えば「犠牲的愛」は、愛する者が自らを差し出して、愛の対象者を高みに持っていく、つまり、対象者を幸福にするために自らを差し出す、犠牲になるという愛であります。

また、他者を犠牲にするエゴイズム、自己愛も、他者を手段にし、踏み台にして自らが「高まろう」とする愛であります。

いずれにしても、愛の「高まろう」とする傾向性は、人間の本性的な営みに属します。愛の向く方向の違いによって自己犠牲愛と他者犠牲愛に分かれます。このような典型的な愛は現実には余りないわけで、その混合形態があるわけです。しかし、典型的な姿を見ておくということは、現実を見るために便利だということがありますから、そういうものを少し見ていきたいと思っています。

「高まる」というのは何において高まろうとするのか、これが1つの問題になります。それを念頭に置きながら、少し哲学の歴史を見ていきたいと思っています。

哲学は今から2600年ほど前に古代ギリシャに始まりました。タレスという人が都市ミレトスにおける皆既日食を予言したと言われていました。今日の天文学で計算するとB.C.585年ということになります。そのタレスが哲学を創始したと言われていました。理論的思考を開始したからです。ですから、理論知＝普遍的知というものの出発点はタレスであります。

また、タレスの少し後輩でピタゴラスという人(B.C.6世紀)がいます。幾何学にピタゴラスの定理というものがありますから、名前をご存じだと思います。A.D.3世紀頃のディオゲネス・ラエルティオスが書いた『哲学者列伝』という本に「自らを哲学者と呼んだ最初の人にはピタゴラスであった、哲学者の意味は、知恵を熱心に追究する人だ」という意味のことが記されています。

時代を少し遡り、B.C.1世紀ぐらいのローマ時代にキケロという人がいました。彼が書いた『トゥスクルム論議』という本にも同様なピタゴラスの話が出ており、ここでも「哲学者というものは知恵を熱心に求めるものである」という意味のことが記されています。同じことを前者はギリシャ語で、後者はラテン語で語っているのです。

古い両語に出てきた「知恵」(sophia)とは普遍知です。普遍知というのは学問知で、どこにおいても、いつの時代においても、誰が言っても、誰によっても、理解され、成立する知を指します。そういう知を愛し追究する人が哲学者だと言われているのです。哲学者はそういう意味で「愛知者」とも訳せます。

また時代をもう少し遡りますが、プラトンという人がいました。この人はB.C. 5~4世紀の人です。タレスから1~2世紀下った人です。プラトンはアカデメイアという学校を作りました。アカデメイアというのは今日のアカデミーの語源となっているものですが、彼が先のように哲学を「愛知」と規定し、それをピタゴラスに帰せたのだとも言われています。それはとにかくとして彼は「哲学というものは知を愛し求めるもの」(『パイドン』)と規定しております。

ここに「愛」と「知」が合体しているのをみることができます。哲学は英語でphilosophyと言いますが、このphiloフィロというのは「愛し求める」という意味があり、sophyソフィーが「知」という意味です。ですからこれは「愛知」という意味で、日本では明治初期に西^{にし}周^{しゅう}という人が「哲学」と訳したわけです。ですから、「知と愛」は、実際には、既にB.C. 6世紀からテーマとされていたのです。

プラトンにはもう1つ「知は恋(エロース)の対象である」とする思想もあります(『パイドロス』)。真理やイデアといわれているものの知が問題とされているからです。この知を求める力を恋(エロース)と言います。これは真理を追究する原動力です。ですから、これは先の「philo フィロ」と似ています。フィロも知を愛し求めていくという意味でした。プラトンの言う「エロース」は日本語では「恋」と訳されていますが「愛」とも訳し得ます。

真理、知を愛し求めて行くのがエロース・恋・愛である。高貴なるもの、自分より優れたもの、価値の高いものを求めていく原動力です。そのように、プラトンは愛知(哲学)の営みを愛や恋という言葉に結びつけています。エロースは人間を「高み」にもたらしめるもの、人間を引き上げていく能力であるところから、これは「ギリシャ的愛」「高みへ向かわせる愛」と定式化されています。ここでいう「高み」とはイデア・真理であります。「知」と「愛」はこうして結びついているのです。

ところが、こういうギリシャ的な考え方に対して、紀元前後のヘレニズム時代にキリスト教が興ってきます。キリスト教の中心思想の1つはご存じのように「愛」です。この愛はエロースではなくて、「アガペー」といいます。アガペーの愛はエロースとは異なります。エロースは価値的に高いものに向かう愛でしたが、アガペーというのは価値の地平とは無関係にある愛で、よく知られた言葉としては「隣人愛」と言われています。これは高い低いという価値の世界とは別の世界に属しています。エロースは時に競争を引き起こしますが、アガペーは逆に平和と友愛、包容と寛容をもたらす力であると言われています。価値のあるものにも価値のないものにも等しく働く力、そしてこの愛は「無償で」与えられる

もの、とされています。

最初に話した『罪と罰』のソーニャの愛、自己犠牲的な愛は、まさにこのようなものを象徴していると考えられます。ドストエフスキーはこのアガペーという愛を念頭に置いていたであろうと思われます。

キリスト教の中心思想は『新約聖書』にあります。同書には愛について多くのことが書かれています。1つテキストを挙げますと、パウロという人はA.D. 64年ごろに殺されたと言われていますが、彼の『コリント前書』(13章)に非常に有名な「愛の賛歌」と言われている箇所があります。ちょっと読み上げてみますが、ギリシヤ的な愛と異なる愛であることが分かると思います。

「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、・・・不完全なものはすたれます。・・・いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」

これは有名な箇所ですが、ここに「知識」が出てきます。知識は愛の前では廃れるものであると宣言されています。ギリシヤでは、知を求めていくエロース、知と結びついた愛(愛知=哲学)がありましたが、キリスト教の愛では、知識は暫定的である、最後には廃れてしまうのだ。愛が最大のものである、と言っています。つまり「アガペーという愛」は「知」等に対して優位性を持つと述べているわけです。これがソーニャの愛の原型になっています。

また『新約聖書』にはプラトンの思想も見受けられます。たとえば『ヨハネ第1書簡』(4, 7-8)に「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」とあります。

愛である神が愛してくれているから、愛された人は愛を持つ。このような考え方を「分有思想」と言います。もとプラトンがこの思想を創始しました。イデア(原型・理想・理念)があって、これを分有することによって、この世の具体的なものが作られる。分有したものはイデアの「写し」である。つまり、イデアを分有することによってこの世のものが存

在するが、しかしこの世のものはあくまでもアイデア(原型)の写像に過ぎない、とするのがプラトンの「分有の思想」です。

例えば「美」のアイデアばバラ、桜などの花に分有されます。その結果「美しいバラ」「美しい桜」が生まれます。この分有の考え方を利用して、神は愛である、この神が愛してくれるから、その愛された人は愛を持つのだ、神の愛を分有するのだ、神の愛の写しを持つのだ、という思想が生まれたのです。これがヨハネの思想です。これはキリスト教思想として受け継がれて行きました。

以上を簡単にまとめますと、古代世界にはギリシア的愛(エロース)とキリスト教的愛(アガペー)があった。前者は価値の高みへ向かう力で「知」と合一し愛知=哲学となります。後者は価値の地平の外にあって知を超えて隣人達を合一する力であります。

さて、時代は下って、西洋中世に入っていきます。キリスト教では、アガペー的愛の立場を最高とし、知の立場は暫定的なものだという基本的な考え方が底流にあります。そしてそれがさまざまな形を、たとえば哲学、文学や音楽という芸術などを形成していく基盤になっていきます。また、アガペー的愛は、宗教的には罪の許しや贖罪という形で表わされます。これはギリシャ的愛・エロースには無いものです。

では、西洋中世では「知と愛」はどのような関係にあったのでしょうか。周知のことですが、西洋中世はキリスト教が支配していた時代で、哲学は「ギリシャ哲学」ではなくて、「キリスト教哲学」(ジルソン)という姿をとります。中世のキリスト教哲学は、ギリシャ哲学の概念を利用してキリスト教を哲学に作り変えて行きました。ここにギリシャ的なエロスとキリスト教的なアガペーがぶつかるわけです。そして、さまざまな軋轢を経て、調和した思想が作られていくわけですが、それには長い時間がかかります。

最初にそれに取り組んだ人はアウグスティヌスという哲学者です。彼はA.D. 4~5世紀の人ですが、新しい哲学(今日で言う中世哲学)を作った1人です。彼は、現代の哲学史の教科書を見ますと、「西洋の教師」と位置づけられている人です。彼は膨大な書物を残していますが、その主著『告白録』を見てみましょう。これはある意味で「愛」に導かれた書物であるということが出来ます。

元々、彼はギリシャの教養を身に付けた人でしたから、後にキリスト教に帰依してクリスチャンになったのですが、きわめてギリシャ的な愛が現れています。それが「西洋の教師」として後の西洋に受け継がれて行きますが、彼の中でギリシャ(ヘレニズム)とキリスト教(ヘブライズム)の混淆が起こるのです。

『告白録』の冒頭に彼は次のように書いています。「あなた(神)は私たちをご自身に向けてお作りになりました。ですから、私たちの心はあなたのうちに憩うまでは安らぎを得ることができないのです」と。

つまり、人間は神によって創られた、人間は神からこの世に出てきた、だから人間の心

は神に帰ることができる、神から出たのだから神に帰っていく、神を故郷として帰っていくのだ、そして、ここに帰り着くまでは、心は安らぐことはない、という意味です。これが『告白録』の主題となっています。「母をたずねて三千里」ではありませんが、アウグスティヌスは神をたずねて一生を過ごした人だと言われています。

さて、神をたずねるときに「愛」が重要な役目を果たしています。この愛はギリシヤ的な性格を持っているわけです。アウグスティヌスはローマ人ですが、ギリシヤの諸思想を教養として身に付けた人でした。そしてミラノ大学の修辞学教授をしていました。そういう人がキリスト教に回心したのです。ですから、ギリシヤ的な教養が彼の中から消えて無くなるということはないわけです。むしろギリシヤ的な教養の中にキリスト教的な新しい考え方を受け入れるということになるのです。余談ですが、ここに哲学がギリシヤ思想からキリスト教思想へ変換される過程が見られます。

先程の『告白録』冒頭では、アウグスティヌスは「心が憩う場」を求めて、「心が憩う場」を探究していく、このときの言わばセンサーが「愛」であります。この「愛」を私は「探究の愛」と呼ぶわけですが、このセンサーによって、目標である「神」に次第に近づいていきます。アウグスティヌスは目標である「神」を次のように言っています。

「あなた(神)こそは私にとって輝きであり満足である。愛され熱望されるものである。愛され熱望されるもの、それが神である。」

アウグスティヌスにとっては「愛され熱望されるもの」が神であります。「愛され熱望される」という受動形の言葉を先程のディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』の言葉で言い直しますと「知恵を熱心に求める」という能動形になります。これはアウグスティヌスの「愛され熱望される」と同じ意味であります。ここからアウグスティヌスはギリシヤの思想の中でキリスト教の神を受け取ったことが分かります。

さらに「愛され熱望される神」についてアウグスティヌスはこのように言っています。「わが神なるあなたをたずね求めていく私は「幸福の生」を求めます」。

幸福の生とは「幸福に生きる」という意味です。ですから、自分が求めているものは幸福の人生なのだ、幸福に生きることなのだと言うのです。誰でも人は幸福になりたいと思います。幸福になりたいと思わない人はいない。幸福を追求することは万人の本性であり天賦の権利であります。

アウグスティヌスは、万人は幸福の生を知識のうちに持っている、それを知っているから愛する、しかし、幸福の生の一部しか知らない、だからもっと知りたいと思い、求めていくのだと言って、私たちは幸福の生の知識が十分ではないから探究し続けていくのだ、単なる知識では満足できない、こういうふうに「愛」は満足する知識を求めてどんどん探究を進めていくのだと言っています。

そして、その幸福の生は「喜び」なのだ、幸せとは結局「喜ぶこと」である、それゆえ

神をたずねるということは、結局「幸せな人生」を生きることをたずねることである、「幸せな人生」というのは「喜び」のことなのだ、心から喜ぶことなのだとします。

では、その喜びはどこから来ているのか、それは、真理から生じる喜びにほかならないと言います。人はだれでも欺かれたら怒ります。子どもでさえも騙されたら怒ります。裏を返せば万人は「真理」「本当のこと」を求めているのです。生まれつきそうなのです。だから、すべての人は真理を求めている、その「真理」というものは「喜び」なのだ、「幸福」なのだ、こういうふうな等式を作っていきます。そして神というのは、それを知ったら自分の心が喜び、幸せになり、本当のことだと知って満足する。そういう知の対象を「神」という名で呼ぶのだと言うのです。

アウグスティヌスは「人間の心はいかなるものも、邪魔ものを間に割り込ませることなしに、聖なるすべてのものがそれによって真である真理そのもの、しかもただその真理だけを喜ぶに至るときに初めて幸福となる」と言います。

プラトンは真理(イデア)の追究を次のように考えます。「感覚は真理の追究を邪魔する。だから肉体から離れることを試みるのだ」(『パイドン』)と。そして「肉体から離れること」は死ぬことを意味します。したがって、哲学というものは知を求めていくときに、結局死ぬことを練習しているのだ、知を求めていくためには、肉体、感覚は不要なのだと言います(『パイドン』)。これはわれわれの通常感覚では理解しにくいことですが…。

アウグスティヌスもプラトンに似た考え方を取りましたが、しかし肉体と感覚が邪魔だと言っているわけではないのです。余計なもの、例えば真理以外のもの、名誉だとか、財産とか、何かそういう愛が、向かうべきものでないものに向かうときに、それらが邪魔ものになる。これらの邪魔ものによって真理、幸福、喜びがその分だけ削られてしまう。だから、そういうものを捨てなければならない。このようにアウグスティヌスは、中途半端な理解や中途半端な真理、あるいは虚偽を差し挟まないようにして「真理」を純粋に愛さなければならないと言っています。

ここから解せられるのは、やはりアウグスティヌスの愛も、高きもの、神に向かう愛であることとなります。ここでいう「高きもの」とは「喜び」であり、幸せな人生であり、そしてまた真実である。そういう意味での高き価値、知を求めていく愛ということになります。アウグスティヌスはキリスト教の愛の思想をギリシヤ的な、エロスの愛を使って表現した人であると言えるかと思えます。

アウグスティヌスは、いわゆるアガペー的な愛も、語ってはいますが、この真理・知の追究という哲学者としての側面とそれほどうまく関係づけられていないと私は感じるので、それはヘレニズムとヘブライズムの両思想の出会いから余り時間を経えていなかったためにギリシヤ思想とキリスト教思想を未だ十分には融和させられなかったのだと思います。元々両思想はそんなに簡単に融和することのできない思想であったからです。

中世の後半にもう1つスコラ哲学という思想があります。トマス・アクィナスというスコラ哲学者がいますが、彼にも愛についての考察があります。これは近代的な愛の理解のベースになっています。トマスは13世紀の人ですから、キリスト教が生まれてギリシャ思想と接触してから1300年も経っています。この長い時間は2つの異質な思想(ヘレニズムとヘブライズム)が次第に和らぎ、理解し、一つの調和へと向かっていく熟成の時間であったと言えます。つまり、1200~1300年の時間というものは異質の思想を調停させるに必要な時間だったと考えることができます。

トマスは愛について次のように言っています。人間には知性というものがある。そして、知性がある以上は意志もまたある。知性と意志は紙の裏表と申しますか、知というものを持つてば、そこに必ず意志が働き得るのだと言います。

そして意志の運動の第一のものが愛なのだ、つまり、意志の運動の一番基底にあるものが愛であるというのです。しかし、これは哲学的な規定であって、まだ文学にまで到達したわけではありません。文学に到達するにはもう少し時間がかかります。

例えば人間は善、よいものを愛する。それに対して、悪は愛さないわけです。これは当然ですね。この悪というものを哲学ではどう捉えるかと言えば、「善が欠けたもの」として捉えます。殺人は犯罪である、悪であると言います。それを哲学はどのように捉えるかと言うと、「命」という「善いもの」を奪う行為である。「殺す」とは人から彼の「命」という「善いもの」を奪うことになる、この「善いもの」が無くなってしまふことが悪なのだと言うのです。

だから悪は善の欠如で、善いものがここにあって、これが欠けてしまうと、欠けた部分が「悪」なのだと言います。しかしこの場合にはまだ欠けていない「善いもの」も一部分は残っています。100%無になれば、それはもはや「悪」とも言えないわけです。

このように悪をとらえるのが西洋のとらえ方です。ですから、悪の実体という考え方も勿論あり得ますが、オーソドックスな存在論からしますと、悪は善の欠けたもの、存在が無いものです。例えば視力が欠けると「目が悪い」といいます。元々10の視力がある眼が6に欠けてしまったら、その欠けた部分4の視力は無になりますので、この欠けた4の部分が悪い。無い部分が悪い。残っている6の視力は善いのだというのです。

だから悪というものは実在ではない、欠けた部分である、本来有るべきものの非存在が悪なのだというのが、存在論の結論なのです。つまり、欠けた部分が悪、悪は非存在である、悪は実在しない、と言うのです。

人間は善を求めます。善を求めて、そのうえで悪が生じます。例えばお金が欲しい。そして銀行強盗をしたら、銀行強盗は非存在(道徳から欠け落ちた部分)となります。これが悪の部分になるわけです。お金というものは善いわけです。この善い部分を求めて、悪(欠けた部分)を行うという。これが犯罪になるわけです。

だから、何か悪いことをすると言っても、やっている本人は自分にとって善いものを取ろうとしているわけです。殺人は、お金を取るためにやるのです。お金は彼にとって善い

ものだからです。だから、先ず自分にとっての善を求めて、その結果、付帯的に悪を行うことになる。哲学ではこういう考え方をとります。そうしますと、人間は悪を意志することはない、常に善を意志するのだ、そして、その結果として、偶々「悪」が生じる、という考え方になります。善を求めて、結果的に、悪が生じるということです。ですから、そういう過程の中で、愛はまず善に向かう。悪を行う者もまず善に向かっている、と言うわけです。

愛が自己に向かう時、そこには自己愛、エゴイズムが生じます。その結果として、他人を道具にし手段にし踏み台となして他人を不幸に陥れる。自分の善を求めて他人を利用するのがエゴイズムというか、他者を犠牲にする愛ということになるわけです。しかしそれは本人にとっては善、良いことを求めている、善いものを愛するということになるのです。その結果、他人を傷つける等の「悪」が生じる。

このように、悪が生じるのには、善が前提になっています。逆に、悪があつて善があるのではないのです。「憎しみ」もそうです。愛がまずあつて、そして愛を欠いて憎しみが生じる。逆に、憎しみがあつて、愛が生じるという考え方は採らないわけです。愛があつて、それが欠如して「憎しみ」が生じる。愛・喜びがあつて、その欠如として「悲しみ」が生じる。このように、欲求的なものの中には、まず一番基底に「愛」が働いているのだというのがトマスの捉え方です。

さらにトマスにおける「愛」の分析ですが、愛が働くときには、次の3つの要素があります。第1は愛する者、愛を実践する者、つまり「愛の主体」です。第2の要素は「愛されるもの」、「愛の対象」です。また「愛する者」(主体)は「何か」(対象)を「誰々のために」欲する。お金を欲するだとか、名誉を欲するとか…。この「誰々のために」が第3の要素です。

この「誰々のために」というところに、自分が入るか他人が入るか、自分が入れば自己愛になりますし、他人が入れば他者愛になります。愛するという行為には、「愛の主体」と「愛の対象」と「誰々のために」という3つがセットになっています。そして愛が成立するときには「愛する者」と「誰々のために」とが合一する、そこに愛の特徴がある、と言うのです。

またトマスは言います。「他者を愛するかぎり、彼はこの者のために善を欲する。かくして彼はこの者の善をあたかも自分自身の善のごとくに考える。この者を遇すること、あたかも自分自身を遇のごとくである。(中略)愛は合成させる力、つまり人はこれによって他者を自己に合体させる。自らが他者に対すること、あたかも自分自身に対するごとくになるに至る」と。

ですから、「愛する者」と「愛されるもの」と「善」が一つになる。これが愛の姿です。お母さん(愛する者)が子ども(愛される者)のためにおやつ(善)を作ります。おやつは善であるわけです。両者がおやつによって一つになる。そこに喜びが生じるということになる

わけです。トマスはこういう基礎理論によって愛の構造を分析しました。

ですから、彼は近代の愛の基本的な構造を作った人と言えると思います。例えば先程の『罪と罰』では、ソーニャは罪を犯したラスコーリニコフが幸せになるために、彼とともにシベリアの流刑地に赴いた。それはラスコーリニコフにとっての善である。しかし、それはソーニャにとっても善なのです。両者は一つですから。こういう構造がトマスの思想の中に明確に表されています。アウグスティヌスの時代にはまだ十分には結実していなかった考え方です。このトマスの中で、ギリシャの考え方とキリスト教の考え方が融合していると思われます。

さて、17世紀以降に近現代という時代が開いてきます。近世のものの考え方はデカルトに典型的に現れます。デカルトが近現代の思想、最初の哲学、近代的なものの考え方の父祖とも言われます。近世において愛の思想は強化されていきます。それはどういう点でかと申しますと、デカルトが意志を強調したわけです。これを「主意主義」と言います。これに対して「主知主義」というものもあります。「知」を主流にした考え方です。ギリシャや中世の哲学の流れは主知主義ですが、近代の主流は主意主義です。意志というものに重心が移っていきます。この意志の優位というものは何に對してかということ、「知」に對しての「意志の優位」です。これが近代の特徴としてデカルトに現われています。愛は意志の一形態でありますから、愛が優位していくという構造が近代の最初にあるわけです。すでに見たごとくキリスト教においてもその芽がありましたが、デカルトにおいて明示的に「意志」に哲学の重点が移り、意志の優位性が認められます。すなわち、「愛が最後に知に勝つ」という基本的な枠組が明示的になるわけです。

次に、カントという人がいます。デカルトが16～17世紀としますと、カントは18世紀の人です。カントは純粋理性(知)に對して、実践理性(意志)の優位ということを言います。実践理性というのは端的に意志を指します。しかし、カントにおいては、この意志と知とは最後まで十分に関係づけられませんでした。しかし結論として、実践理性が優位だと言うのです。この意志の優位という点でカントはデカルトと同じ系譜に立っています。

そして、18～19世紀にかけてドイツ観念論が生まれます。このドイツ観念論の中に主意主義が強く受け継がれ、意志というものを中心に哲学(つまり世界観と人間観)を考えるようになりました。シェリングの哲学がその典型的な例です。そして、いよいよ現代です。現代哲学を開いた1人とされる哲学者がショーペンハウエルであります。彼は「盲目の意志」を原理に哲学を作りました。何か知らないけれども人間を突き動かすものが「盲目の意志」です。

そのモチーフをニーチェが受けました。ニーチェはそれを「盲目」ではなくて「Leben, 生, 生き方, 人生, 生活, 生命」と言いますか、その現れとしての意志、生命の現れとしての「意志」の立場を確立するわけです。

すなわち、中世哲学では、知のあるところには意志がまたある、さらに意志の根底には

愛があると、知と愛がいわば同列に＝で並列していたのですが、現代哲学になりますと、生命、生の現れとして「意志」があるのだとなり、知というのはこの生命の上澄みというか、逆に、知のもっと下に生命がある、そしてその生命の現れとして「意志」がある。知性の根底に、この生命の地平があり、生命の地平に「意志」を措定するのです。ここに知と意志の並列関係が崩れ、意志の根底性というか優勢性がいっそう明示的になります。

知性は理解の力ですが、意志は感性の力です。ニーチェは、感性は理解の基礎なのだ、生命の現れなのだと考えたのです。ですから今、学校では知育ばかりではなくて、もっと感性を養おうとって、感性というものを強調するのが流行で、知の地平、理解ということは実はこの生命、感性によって支えられているのだ、そういったものが十分発達していないと教育現場で知育が進まないのだと言われていています。学校の勉強だって、子供はおもしろくないからやらない、ということになるのです。

ですから、意志を捉えるときに、知性と意志とが古代や中世におけるように並列ではなくて、知よりも一段根底へ下がった生命の現れとしての意志と、生命の次元においてとらえた感性に根源を置くという点に、現代哲学の特徴があり、そして、ここでは理解・知よりも感性・意志が優先するのです。そうなりますと、ここに、明らかに「知に対する意志の優位性」が姿を現わすのです。

ニーチェはそういうところから、古い思想、キリスト教を批判します。キリスト教というものは、出発はよかったかも知れないけれども、組織化され、神学化されてくると墮落してきた。非常に硬直化して、知性＝意志＝愛という図式でとらえていくと、人間を生かすよりむしろ殺していくことになる、窒息させていくことになると考えました。出発の当初はそれでよかったのかも知れませんが、社会制度がだんだんと出来上がって、法王を頂点として階層化し、社会化していくと、結局、知性、意志、愛というもので固められた神学で武装された権力体制、社会体制になり、キリスト教が人間を窒息させていくことに加担するようになる。

そうではなく、もう一段深い生命の次元において、生命の現れとして意志を解釈し直して、その発展として感性を磨き、その次元において哲学を作る。これがニーチェの考えです。すなわち、愛を、知性の次元でなくて生命の次元に、知よりももう一段深い生命の次元に、置いて捉え直すわけです。

そこから、ニーチェはキリスト教の「隣人愛」に対して懐疑的になります。近いものだけを愛してどうするのだと。近いものしか愛せないのはそれだけ力が弱い証拠だと。力というのは意志の力、精神の力ですが、もっと力が強い者は隣人だけではなくて「より遠い者」までも愛する力を持つのです。

この考え方は、例えばこれぐらい捨ててもいいだろうと思って、プラスチックを燃えるごみの中に入れてしまった、1 つぐらいいいだろう、大勢に影響がないだろうと。ところがそういうことが重なると、環境汚染、ダイオキシンをたくさんまき散らすことになる。

将来のもっと広い地域のことを考えると、やはりそういうことは止めておこうという考え方になります。もっと広い地球規模でものを考えないといけない。いや、地球規模でなくて、もっと歴史的に、将来の世代、子どもたちが大きくなって、孫ができて、その次は…とさらに重ねた後までも、地球の環境をきれいに保つことを考えなければいけないという考え方です。

これはやはり目の前にいる隣人だけを愛するのではなくて、今は見えない人々にも愛を及ぼす。そして、未だ存在していないが将来存在するであろう人々をも愛する。いや、人間ばかりではない、動物も森林も愛する、というところまで意志の力を強めなければならないわけです。その精神力というか、意志力というか、そういうものを全部ひっくるめて生命の力(生きる力という言い方もされますが)生命の現れとしての力、力強い人、生命力の非常に大きな人、そういう人は、隣人ばかりではなくて、最も遠いものまでも愛の射程に入る、そういう愛が本当の愛だということです。こうしてニーチェはキリスト教の「隣人愛」は不十分だとするわけです。

ですからニーチェの哲学は、知ではなくて、知の根底、Leben(生命、生)というところまで下って、力、充実、そして生き生きとした精神活動などの全部の充溢を実現することにあります。これが生命の力、生命の次元で働く意志の力だ、こういうようにして Wille zur Macht「力への意志」が現れます。これを「権力の意志」とも訳する人もいますが良い訳ではありません。ニーチェは「力への意志」を中心に「愛」を考えました。

ですから、ニーチェによって高みへ向かう愛、ギリシャのエロース的な知への愛は少し外見を変え、「高貴」に向かっていく生命の力、生命の高み、その現れとしての生命力の大きさ、そういうものへと向けていくのが「愛」でありまた、それが「最遠なるものへ及ぶ愛」でもあると、このように「愛」を考えました。この愛を持つ者は非常に充実した、力のみなぎった生命を持つことになります。

キリスト教のアガペーは自己犠牲愛でしたが、ニーチェはそれを自らの生命力の現れであり、生き生きとした自らの力の流露として充溢し流れ出る愛としてなら認めますが、それ以外の、外から犠牲を強要するものをニーチェは愛としては認めないのです。

ですから、ただ自分を差し出し自分を犠牲にするだけでは、幸福にはなれない。ニーチェの立場から現代的に解釈すればそうです。自己犠牲というものは、自らの生命が、生命感があふれ出て、喜んで自らを捧げる、そして、そこにおいて生き生きとした充実感を持つ。だからこそ、捧げられた者も幸せになるし、捧げた本人も充実して幸福になる、という人間のあり方を現代哲学者ニーチェは拓いたのです。

ですから、近代日本の漱石などの作家たちが悩んだエゴイズムというものは、ニーチェの立場からすれば愛の出発点なのです。なぜなら、エゴイズムを否定することは或る意味で自分自身を否定することになるからです。エゴイズム、自己愛は当然存在するわけです。

が、それを否定するのではなくて、ニーチェ的に言うならば、生命のあふれ出る力強い働き、そこにおいて、必要とあらばその充実感の下に自他の一致があり、その下で自分を差し出すというか、犠牲にすることもあり得る、そういう「力への意志」でもって「狭いエゴイズム」を克服していく。こういうことは、力強い最高の愛がないとできません。

自分を愛し、自分の近くの隣人を愛しているだけで良いのであれば、他のものは知らないということになって、狭いエゴイズムに陥ります。そうではなくて、もっと遠くのものまでも含み込むような大きな力の下に「最遠愛」を実現した者のみが、エゴイズムをある意味克服できます。しかし、エゴイズムを完全に克服することは難しいですが、少なくとも、漱石のような明治の近代文学者・インテリたちがぶつかったエゴイズムの問題、テロ、戦争といったような今日の問題は、そういう形で、少なくとも和らげられ得るのではないかと思われまます。

もっともキリスト教は「隣人愛」だけを説いたわけではありません。「汝の敵を愛せよ」とも説きました。「敵」は心理的に最も遠い者です。このものを愛することができる人は、ニーチェのいう「最遠愛」であり、力の巨大な者と言えるかも知れません。

以上簡単にまとめますと、愛には自己犠牲的愛と他者犠牲的愛の2種類があります。両者は共に「高み」「高貴」を求めます。普通、両者は互いに対立し合うものですが、しかし、ニーチェのいう如くに、生命、意志の大きな力においてはじめて相矛盾無く調和し合う可能性を持つと言うことが許されるでしょう。

今日は「愛」に足場を置きながら「知と愛」の話をさせていただきました。哲学入門講座のつもりでありましたが、ごちゃごちゃとしていて分かりにくい点もあったと存じます。どうかお許しください。ご静聴まことに有難うございました。